

経歴

平成24年 4月 総務省採用  
同 自治行政局地域政策課地域情報政策室  
平成24年 8月 現職

できっこないをやらなくちゃ

PROFILE  
19

新潟県総務管理部市町村課

新納 範久

Niino Norihisa

こんな田舎を盛り上げるなんてできっこない。私の声で日本を変えるなんてできっこない。こんな不景気で新しいことなんてできっこない。私達が物心ついてからの20年余り、この国は「できっこない」で溢れ返っていました。「私なんかでできっこない、誰かがやってくれないだろうか」そんな声を、「私ならできる、私がやってみせる」に変え、この国をやる気に溢れた国にすること。それが私の夢です。私がその夢を叶えるために、総務省を選んだ理由をお伝えしたいと思います。

「人を大事にする」ということ

「人を大事にするのが総務省だ。」総務省の先輩方が口を揃えて語る言葉です。

就活の時期を迎えている皆さんならば、おそらくよく耳にする言葉だと思います。そしてその言葉の多くは、人材育成を大切にするという意味です。

しかし、我が省の先輩方が口にする「人を大事にする」という言葉は、それだけの意味に留まりません。もちろん人材育成を大切にしているという意味もありますが、それ以上にこの言葉は総務省のこの国に対する理念を体現するものだと私は思います。個「人」の意思を政策に反映するための住民自治。「人」の一票の価値を守るための選挙制度。「人」の命を守る消防庁。多岐にわたる業務に携わる総務省ですが、そのどれもが「人を大事にする」という信念に基づいています。

総務省との出会い

「人を大事にする」ということの重要性を私が痛感したのは、大学の空手部で主将をしていた時です。部の勝利のために、強引な目標設定と練習メニューを強制する中で、部内でのモチベーションの格差、更には部全体のモチベーションの低下を私は感じるようになり

ました。それ以来、部という組織は参加している部員一人一人のためにこそ存在するべきだという思いから、個々の声を聞くこと、個々の声を全体に伝える場を設けることを心がけました。そして個人を大切にすることが個々の自発的な努力を促し、組織全体のやる気を高めると思うようになりました。

そんな私にとって忘れられない言葉があります。「国という大きな組織の決定から、地方の想い、ひいては個人の想いを守ること。それが我々総務省の仕事だ。」総務省の説明会で出会った、ある先輩の言葉です。国の中枢にありながら、こんなにも一人一人の想いに目を向ける人がいるのかと思ひ、心が震えました。こんな先輩たちと一緒に、この国をもっと一人一人の想いを大事にする国にしたい。こういった想いを胸に、私は総務省を志すようになりました。

この先輩だけでなく、総務省の先輩方は誰もが一人一人の人間を大事にしています。「国」という、非常に大きく抽象的なものを、一人一人の人間の集合として具体的に捉えようとしています。そんな信念を形にしたものが、国と地方を行き来する総務省独自のキャリアパスです。

「人」を知るために現場へ

私が今担当している仕事の一つに、各地域個別の事情や、災害等の緊急の財政需要に対して充てられる財源である特別交付税の算定というものがあります。例えば新潟県の場合は除雪にかかる経費が代表的ですが、新潟県内でも降雪量は市町村によって何倍もの違いがありますし、除雪ノウハウ・体制の違いや、道路・集落の密集具合等によっても経費は大きく変わってきます。更に、実際に市町村の職員と顔を突き合わせてヒアリングする中で、地図やデータを見るだけでは分からな

かった市町村ごとの様々な歴史的経緯や慣習の違い、そこに住む人の想いが伝わってきます。新潟県庁に赴任する前に、先輩に「社会がいかに複雑系であるか、日本の地域がいかに多様かを学んで来い。」と言われましたが、今まさにこのことを痛感しています。

「できっこない」をやってみよう

その名の通り、総務省は「総てを務める省」です。あらゆる「できっこない」課題に対し、「人を大事にする」という切り口で立ち向かっていくのが我々総務省です。是非色んな先輩方に会ってみてください。あなたが心に抱きながら、解決「できっこない」と思っている課題に対しても、きっと何かの取り組みを行っているはず。そしてそこに可能性を感じてもらえたのなら、我々と一緒に、「できっこない」をやってみませんか。



4Mの積雪の中、雪かきボランティア！



赴任して2日目、民謡流し祭りにて(筆者右)

経歴

平成24年 4月 総務省採用  
現職

今できることを全力で

PROFILE  
20

総務省行政評価局総務課

白倉 侑奈

Shirakura Yuna

私が総務省を選んだ理由

私が具体的に「就職」を意識し始めたのは、大学二年生の頃でした。父が警察官だったこともあり、人のために働くことのできる公務員に、漠然とした興味を抱いていました。その上で、今の日本に必要なこと、且つ自分の手でどうにかしたいこととはどのようなことか考えました。悩んだ末に私が出した答えは、「今ある組織や人員をもっと活用すること」でした。新しい物事を生み出すことももちろん必要だと思うのですが、様々な物や組織で溢れているこの社会においては、既存のそれらを生かしつつも、在り方や機能を見直すことで解決できる問題もきっと多くある、そう考えたのです。そんな中、総務省の説明会で、行政評価や機構定員の管理についての話聞き、ここならば行政の在り方について根本から考える仕事ができると思い、総務省の門を叩きました。

また、説明会等で話した職員や、官庁訪問の控え室で出会った今の同期には、自分のやりたいことをしっかりと持っていたり、周囲を見回して気遣いが出来たり、と素直と一緒に働きたいと思える人が多かった点も、総務省の大きな魅力でした。入省してからその印象は変わることなく、総務省を選んだときの自分の直感は間違っていなかったと思います。

今取り組んでいる業務

現在は、行政評価局総務課というところで業務に取り組んでいます。行政評価局の業務は、各省庁の業務について効率性・有効性等を検証し、勧告を行う評価・監視や、国の行政等への意見・要望を受け付け必要なあっせんを行う行政相談等、多岐に渡ります。特に上記の評価・監視については、局の職員が自分の担当する調査等に対して誇りを持ち、それらに

非常に真摯に向き合っています。まず、調査のテーマ選定の段階から、局内はもちろん、大臣等の政務とともに多くの議論を重ねます。そうしてテーマとなった各省庁の政策を、背景等まで含め、勧告の内容に少しでも誤認がないように細心の注意を払って丁寧に調べます。そのため、その調査結果は鋭い視点と説得力を持っており、マスメディアに大きく取り上げられることもしばしばあります(私が入省してからの例でいうと、高速バス事故や法科大学院に関する報道で取り上げられました)。

そのような局の中でも、私は総括係という局のとりまとめを行う部署にいます。省全体のとりまとめを行う大臣官房と局にある各課室との間を取り持つような仕事をしています。例えば、国会において当局への質問があるときに、大臣官房からの連絡を受けて該当する課室と連携して答弁の作成をしたり、完成した答弁を大臣官房に提出したり、と各課室をサポートするような仕事です。

総括係に在ると、局に関する情報が幅広く集まり、多くの案件を取り扱うことができる反面、前述した評価・監視等の業務を直接行うことはあまりないので、自分に何ができるのか、悩むこともありました。しかし、総括係だからこそ、行政を取り巻く幅広い情報に触れることができ、一年目から仕事の全体像をつかみ、視野を広げるとてもいい経験が出来ていると感じています。また、各課室がそれぞれの業務に集中できる環境作り等、行政評価をより円滑に推進するためのサポートをすることができます。今自分ができる業務に全力で取り組み、行政の取り組みを見直す行政評価に少しでも貢献していきたい、そんなことを考えながら日々の仕事と向き合っています。

最後に

業務時間中のパフォーマンスを上げるためには、仕事後や休みの日も充実していることが大切、という考えのもと、休みの日には積極的に大学時代のサークルの仲間や、地元の友達と会うようにしています。毎日仕事の事ばかり考えていると、いつの間にか必要以上に肩に力が入り、視野が狭まってしまうことがあります。そうしたときに、自分と異なる環境に身を置く友人の話や、違うフィールドで頑張っている人もいるんだ、と自分の事を客観的に見ることができます。また、毎日は会えなくとも、自分のことを理解し、応援してくれる存在を実感できて心強く感じます。

私に限らず、総務省には日々の生活も充実させつつ、業務にも全力で取り組むことを意識している職員が多くいます。そのような先輩・同僚に恵まれたことも、日々の仕事のエネルギーになっていると思います。こういった、総務省の中で働く人の魅力や雰囲気等は、実際に職員と話すことでつかんでいただけないかと思っています。ぜひ様々な職員と会って、総務省の雰囲気を肌で感じてみてください。



休みの日には、積極的に大学時代のサークルのメンバー等と会うようにしています。